
彼は彼女は

郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は彼女は

【コード】

N0296E

【作者名】

郎

【あらすじ】

彼は彼女は、美しい人であった。

彼は彼女は美しい人であつたけれど、それはどこか浮世離れした、この世の物ならぬ美しいさであるかのように感じられた。

事実彼は彼女は終始生氣を感じさせない人であつたし、また本人達が彼と彼女意外の人という人に対しまるで興味が無かつた事もその原因なのだろう。彼は彼女は彼と彼女だけを見ていて、他の事は心底どうでもよいというふうに感じているようであつた。

彼も彼女も友人と言う者をひとりとして持たなかつたし、美貌に魅かれいいよる多くの（それはそれはとても多くの）異性達にもつれなかつた。彼が彼女が口をきく事はひどく少なく、珍しがられる事であつた。そもそもにして彼も彼女も人前に姿を出すことを決して好まず、いつも二人きりであるようであつたので、私達その他多勢が彼の彼女の声を聞く機会など決して多くはなかつたのだ。

彼が彼女が二人きりである時にはどうしているのか、何をしているのか。それは私達のような若造の、もつぱらの興味の対象であつた。それは勿論二人ともできていないに違いないのだ、乳繰り合つてでもいるのだらうさとちやかし笑う者もおれば、あの得体の知れない奴等の事だ、口も開かず向かい合つて黙つているのだと当然のように言う者もあり、一方には、彼を彼女を神聖な者とし崇める者も確かにいた。そしてそれ以外の多くの者達は彼に彼女に恋焦がれて、恋しい相手とともに過ぐす、彼に彼女に嫉妬していた。

私も思春期をむかえたおりには、彼に彼女に恋焦がれた。けれどそれは後に他の者達へ抱いたような、異性への愛とは何処か違つたのではないかというふうに思う。そもそもに私は、彼と彼女とを離し考える事は出来ずにいて、結局彼と彼女両方に対し恋をしたのだ。私に同性を愛す傾向はなく、それ以降は異性にしか恋をしていない。それに私は一様にして、ろくに交流もない相手に対し、恋焦がれる事などしない。外見やら印象やらで異性を愛す事は邪である

と思つていたし、そういう輩を未だ輕蔑してもいるのだ。彼へ彼女への初恋は、私のたった一つの例外であつた。

結局のところ、当然でもいうべきなのかどうなのか、彼も彼女も誰か一人に恋慕の情をそそぐ事などしなかつた。それは彼が彼女が彼に彼女にとうに惚れていたからなのだと言つては、私はそうとは信じていない。

彼も彼女も相手に対し、こうと言つた情は抱いていないふうに見えるのだ。だからといって、では彼が彼女が彼を彼女をどう感じていたのかなどと、私には推測する事すらも叶わぬのだが。

私と、またその友人とがあらかたに学業を終えた頃、彼は彼女は忽然と町から姿を消した。行方を知っている者などは、当然ながらいるはずもない。長いこと、私達の恋慕だの憧れだの羨望だの奇異だの好奇だの嫌悪だの嫉妬だのといった、色々な視線をいたずらに集めた二人の失踪に、私達はどよめきたつた。やれ駆け落ちだだのやれ心中だなど、皆してやかましい事このうえなく騒いだけれど、桜が散る頃になれば、皆がそれぞれでなくなつていった。

彼に彼女に現在も続く形で恋をしていたはずの若造共は、いとも簡単に次の恋をし、それを実らせもしたし散らせもした。既にとうの昔に彼へ彼女への恋を終らせていた私達や、そもそもにして彼に彼女に恋などしていなかつた者達は、彼を彼女を青春時代の思い出の象徴として心に残した。

かくして彼は彼女は、私達の世代に共通する伝説となつたのだ。

彼は彼女は、今だこの町に居ることなく、血の通わない、伝説の中の人としてだけ存在している。實際のところ、私達の中に彼の彼女の事を多く知る者はおらず、私達の中の彼は彼女は、「美しい人」というだけの単なる偶像と化したのだ。けれどそれは、私達の思い出を彩るにはこの上無き良い記号として機能したし、初恋の思い出を美化してもくれた。

どこかには存在したであろう、彼の彼女の親類達の中にならば、彼の彼女の事をよく知る者もいたのだろうか。そしてそういう者達

は、偶像ではない、彼を彼女を覚えていたりするのだろうか。

先日、仕事で都心へと赴いたとき、青春時代の残響に出合った。それは確かに私が恋した、彼で彼女であったのだ。彼は彼女は私が知る姿のまま、無表情に駅のホームをかけていた。私はよく彼を彼女を見たかったけれど、電車は酷にも酷い速さで通り過ぎていつてしまった。

実は、私は近日中に結婚をする予定である。青春の残響を見た夜に、そうする事を決意したのだ。相手の人は、正直あまり美しくない。けれど柔らかく笑う人で、深い考えを持つ人だった。彼にも彼女にも、決して似ていたりはいらない。

きのう、食事を共にした時、彼の彼女の事を話してみた。私の初恋の人の事を、私が抱くその偶像を。

あの人は決して馬鹿にせず聞いてくれて、大切な思い出なのだろうと言つて柔らかく笑つた。その話題はただそれだけで終つてしまひ、その後はあの人の初恋の話をとうとうと聞いた。あの人の初恋は近所に住んでいた高校生へと抱かれた物であり、とても無邪気な可愛らしい物であった。二人で語らい笑いあつて、私はたしかに幸せなのだ、ふかくかみ締める事ができた。

そのあとにすぐ帰路につき、私は彼の彼女の事を思い出した。けれど、どう頑張つても彼の彼女の顔が思い出せない。先日駅で見たときは、確かにそれだと思つたのに。

だというのに、それを私はさして悲しいとも淋しいとも思わなかった。大切な思い出であつたはずなのに、輝かしかつたあの時代の、象徴であつたはずなのに。

ポケットに手をつまめば、携帯電話が震えていた事に気付く。名前を見ると、今しがたわかれたあの人からだ。

すぐに電話を開き、もしもと言つてよびかける。声は自然にはずんでいて、顔はだらしなくほころんだ。結婚式は六月だ。楽しみで嬉しくて仕方が無い。どうやら一人で笑つてしまつていたようで、どうかしたのかと問いかけられる。なんでもないと答えながら、私

の頬は赤くなった。
帰ったら、もう一度式場のパンフレットを読んでしまおう。そうして私はもう一度、贅沢に幸せをかみしめよう。
軽い足取りで家へと向かう私の頭に、彼は彼女は、もう既に必要ではないようだった。

(後書き)

突発的に思いついて出だしだけ書き始めましたが、気がつけば思いついていた物とは全くの別物になっていた不思議な代物です。短時間で書き殴って物なんです、勢いでこのまま載せてもらいますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0296e/>

彼は彼女は

2010年10月28日03時39分発行